

エペソ人への手紙6章1-4節

「主にあって両親に従いなさい」

2005.10.16 赤羽聖書教会主日礼拝

1. 子どもたちよ。
主にあって両親に従いなさい。
これは正しいことだからです。
2. 「あなたの父と母を敬え。」
これは第一の戒めであり、約束を伴ったものです。すなわち、
3. 「そうしたら、あなたはしあわせになり、地上で長生きする。」という約束です。
4. 父たちよ。
あなたがたも、子どもをおこらせてはいけません。
かえって、主の教育と訓戒によって育てなさい。

説教

使徒パウロは、夫婦のあり方を教えてから、次に子どもの教育問題を取り上げます。

この順序は重要です。

まず、夫婦があって、親子の関係があるのです。

パウロは、夫婦問題を無視したり、夫婦の関係をないがしろにして、親子の関係を説くではありません。

夫婦あっての子育てです。

夫婦の関係が崩壊すれば、子育てどころではありません。

夫婦関係が崩壊しているところで健全な子育てはできません。

その意味で、子どもが健全に育つために極めて重要な教育環境は、
その子どもの両親が健全な夫婦関係を保っていることと言えるでしょう。

家の大きさとか、子ども部屋の広さとか、そのようなことは本質的な問題ではありません。

家の経済的な豊かさとか、親の学歴、社会的な地位も本質的な問題ではありません。

子どもにとって何より大切な教育環境は、その両親が互いに心から愛し合って生活しているということです。
これこそが健全な子育てのためには何より大切なことです。

ですから、健全な子育てをしたいと心から願うなら、まずは健全な夫婦関係を築くことです。

夫は妻を愛し、妻は夫に従う、健全な夫婦関係を築くことが大切です。

エペソ書5章18節からの流れで言うならば、

私たちが聖霊に満たされる時に、

神さまの栄光を見て神さまをほめたたえます(19)。

そして、すべてのことについて神さまに感謝します(20)。

それから、キリストの恵みに畏れ入ってキリストの御心を行うようになります(21)。

そうして、妻は夫に従い、夫は妻を愛する、健全な夫婦関係を築くようになります(22-33)。

そして、それから健全な親子関係を築くようになるのです。

それでは、私たちはどのような子育てをなすべきでしょうか。

使徒パウロは、どのような子育てをすることが理想と考えていたのでしょうか。

それが冒頭のみことばです。

1. 子どもたちよ。

主にあつて両親に従いなさい。

「子どもたち te,knon」と訳される言葉は、「小さな、幼い子ども」を意味します。

初代教会の当時は、小さな子どもたちも教会の礼拝と一緒に参加して牧師の説教を聞いておりました。

使徒 21:5 を見ると、パウロ一行の送別会に子どもたちも一緒に参加して、一緒にひざまずいて祈る場面が出てきます。

「しかし、滞在の日数が尽きると、私たちはそこを出て、旅を続けることにした。

彼らはみな、妻や子どももいっしょに、町はずれまで私たちを送って来た。

そして、ともに海岸にひざまずいて祈ってから、私たちは互いに別れを告げた。」

このように、初代教会では、当たり前のこととして、

幼い子どもたちも、大人たちと一緒に難しい讃美歌と一緒に歌い、難しい聖書の話聞いていたのです。

それで、使徒パウロは、ここで、小さな、幼い子どもたちに呼びかけます。

彼らに向かって説教をしているのです。

そういう意味では、

礼拝に、乳飲み子は勿論のこと、幼稚園児、小学生、中学生、高校生に至るまで、

全員参加してみんな総出で神さまを礼拝することは、今日に於いても理想であると思います。

また同時に、子どもたちが教理を理解することを補助する教会学校の働きも、教会の大切なつとめであると思います。

「両親に従いなさい。」の

「従いなさい」と訳される言葉は、

「下で + 聞く (u`p+akou,w)」という言葉です。

そこから「聞き耳を立てる」、さらには「聞き従う」という意味で使われます。

これは、パウロが妻たちに対して勧めた夫への「従順」とは異なる言葉が使われています。

「妻たちよ。

あなたがたは、主に従うように、自分の夫に従いなさい。」(5:22)で、

妻が夫に「従う」よう勧める場合には、

「下に + 置く (u`po+ta,ssw)」という言葉が使われて、

夫婦の立場の違い、夫婦の秩序が説かれているのに対して、

子どもたちには「下で、聞く」ということが命じられているのです。

つまり、ここでパウロが幼い子どもたちに命じていることは、

自分の親の言うことをよく聴いて、その教えに心から従うということです。

それがここで子どもたちに使徒パウロの要求している唯一のことです。

それ以外のこと（2, 3節=十戒の「父と母を敬え」についての言及）は、単に「**子どもたちよ。主にあって両親に従いなさい。**」という命令を補足、あるいは解説しているに過ぎません。ここでのメインの文は、「**子どもたちよ。主にあって両親に従いなさい。**」という命令なのです。要するに、使徒パウロがここで子どもたちに対して言いたいことは、「子どもというものは、親の言うことさえよく聞いていればそれでいい」ということになるでしょう。戦時中の全体主義教育の反動として、戦後は、チーパッパ式の教育を廃止し、アメリカ式の、より個人を重んじて、個人の自主性とか自由を重視するような、自由保育なるものが流行しました。プログラムが無くて、自分の思った通り、好き勝手に、自由に遊ばせるのです。そういう教育を取り入れた幼稚園は、より進んだ進歩的な幼稚園として、もてはやされたものです。

反面、その反動として、あまりに自由にやりすぎたせいか、学級崩壊などという現象も起きました。私も、自分の娘の小学校一年の授業参観に行って、驚きました。まさに、学級崩壊寸前という感じだったからです。

このような反動を受けて、教育基本法の改正による「愛国心教育」の復活、「忠君愛国」度合いの通知票による評価（これは事実上の「教育勅語」復活と言える）、現実に行われていることとしては、「日の丸・君が代」強制に象徴されるような、戦前の全体主義教育が復活しようとしているのです。

このような世の現実の中で、私たちは神のことばである聖書に聞き従わなければなりません。聖書は、このことに関して、何と言っているでしょうか。

1. 子どもたちよ。

主にあって両親に従いなさい。

これが聖書の教えです。

それは、単に子どもの自主性を重んじて自由に好き勝手にやらせるということではありません。また、反対に、戦時中の教育のように、ただ上からの命令を押しつけて強制するということでもありません。これから見ていきますが、使徒パウロは、独自の教育観をここで展開していきます。

1. 子どもたちよ。

主にあって両親に従いなさい。

どうして子どもは親の言うことをよく聞かなければならないのでしょうか。

一節の続きでこう言われます。

「これは正しいことだからです。」

つまり、神さまの前に正しいことだ、神さまの前に「義」なることだ、

神さまに喜ばれることだ、と言います。

あるいは、人として当然なすべきことだと言うのです。

考えてみれば、自分の親ほど世話になった人はいません。

何だかんだ言っても、親あつての自分です。

神さまは、親を通して、私たちをこの世に産んでくださいました。

親を通して、いのちを下さいました。

親を通して、養ってくださいました。

(おむつを取り替えて、ご飯を食べさせて、一緒に遊んで、遊びに連れて行ってくれた。)

神さまは、**親を通して**、ご自身の愛情を注いで下さいました。

親を通して、ご自身の正義を教えて下さいます。

親を通して、教育し、育てて下さいました。

神さまは、**親を通して**、ご自身の栄光を私たちのうちにあらわして下さるのです。

このように、親というものは、いわば**神さまの代理人**です。

勿論、完璧な親はこの世に誰ひとり存在しません。

だから、自分の子どもに完璧に愛情を注ぐことなどできません。

むしろ、欠けだらけです。

しかも、ひどく欠けだらけです。

しかし、たとえどんなに不十分であっても、**私たちは、親を通して神さまの愛を知ります。**

どんなに足らないことだらけでも、私たちは、親を通して神さまの義を学びます。****

だから、私たちが、神さまの次に世話になっているのは、他でもない親ではないでしょうか。

それで、その親の言うことを聞くということは、使徒パウロの言うように、当然なことと言えるでしょう。

「正しいこと」です。

「義」なることです。

神さまの前に正しい、

神さまに喜ばれることです。

父なる神さまは、**キリストの教会**と**親**に子どもを教育する権能をお与えになりました。

教会に対しては、復活のイエスさまが、

「わたしには天においても、地においても、一切の権威をが与えられています。

それ故、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。

そして、父、子、聖霊の御名によってバプテスマを授け、

また、わたしがあなたがたに命じておいたすべてのことを守るように、彼らを教えなさい。

見よ。

わたしは、世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいます。」

マタイ 28:18~20

親に対しては、旧約の時代、

「あなたの父と母を敬え」と十戒の中で教えて、子どもがその親から学ぶようになさいました。

箴言の中には、親の言うことによく聞き従えと何度も何度も教えられています。

「わが子よ。

あなたの父の訓戒に聞き従え。

あなたの母の教えを捨ててはならない。

それらは、あなたの頭の麗しい花輪、あなたの首飾りである。」 1:8-9

「子どもらよ。

父の訓戒に聞き従い、悟りを得るように心がけよ。

私は良い教訓をあなたがたに授けるからだ。

私のおしえを捨ててはならない。」 4:1-2

「わが子よ。

あなたの父の命令を守れ。

あなたの母の教えを捨てるな。

それをいつも、あなたの心に結び、あなたの首の回りに結びつけよ。

これは、

あなたが歩くとき、あなたを導き、

あなたが寝るとき、あなたを見守り、

あなたが目ざめるとき、あなたに話しかける。」 6:20-22

「知恵のある子は父の訓戒に従い、

あざける者は叱責を聞かない。」 13:1

「愚か者は自分の父の訓戒を侮る。

叱責を大事にする者は利口になる。」 15:5

「自分の父をあざけり、

母への従順をさげすむ目は、

谷の鳥にえぐりとられ、わしの子に食われる。」 30:17

このように、神さまは、教会と親に、子どもを教育する責任と権威をお与えになりました。

ですから、親を呪う者には、最も厳しい刑罰がかせられました。

「誰でも自分の父あるいは母を呪う者は必ず殺されなければならない。」（レビ記 20:9）

これは神の御名を冒瀆する者に対する刑罰と全く同じ刑罰です。

また、自分の親に聞き従わずに放蕩に耽っている子どもに対しても、死刑が科せられました。

「かたくなで、逆らう子がおり、
父の言うことも、母の言うことも聞かず、
父母に懲らしめられても父母に従わないときは、
その父と母は、彼を捕らえ、町の門にいる町の長老たちのところへその子を連れて行き、
町の長老たちに、
『私たちのこの息子は、かたくなで、逆らいます。
私たちの言うことを聞きません。
放蕩して、大酒飲みです。』と言いなさい。
町の人々はみな、彼を石で打ちなさい。
彼は死ななければならない。
あなたがたのうちから悪を除き去りなさい。
イスラエルがみな、聞いて恐れるために。」 申命記 21 章 18 ~ 21 節

このことは、神さまが親に自分の子どもを教育する権威をお与えになっている、ということの意味です。
つまり、子どもを教育する責任と権威を担っているのは、親なのです。

学校は、親の教育権の委託を受けて、その一部（一般教養部門）を受け持っているに過ぎません。
そもそも公立学校というのは、そのルーツは 16 世紀宗教改革にさかのぼります。
ドイツのマルチン・ルターが普通教育を提唱し、領主たちに領民のために学校を作らせたことと、
カルヴァンがスイスのジュネーブで（「ジュネーブ・アカデミー」）世界で最初に公教育の学校制度を作ったことが最初です。
日本における学校教育制度は、
明治時代に、ドイツとアメリカ（これはもとを正せばカルヴァンの宗教改革にさかのぼる）から持ち込まれました。
その公教育の目的は、もともと「聖書を正しく理解するため」でありました。
つまり、自分の頭で聖書を読み、自分の頭でよく考えて、神さまを知るためには、一般教養が必要であったのです。
そもそも自分で字が読めなければなりません。
語学や自然科学、歴史や古典の知識がなければ、
聖書の時代背景は勿論、聖書が言わんとしていることさえ正しく理解できません。
中世のカトリック教徒のように、ただ無知蒙昧にお上の言いなりに盲信する以外にありません。
みなさん、プロテスタント教会というのは、知性が大事なんですよ。
盲信じゃダメなんです。
自分の目で見て、自分の頭で考えて、自分の判断をフルに働かせて、真理を学ばなければならないんです。
そうでなければ、危ない宗教団体になってしまいます。
だから、一般教養ということを重要視するんです。
それで、公立学校制度を生み出しました。
今は教会と全く別になっていますが、もともとはセットだったんです。

それで、一般教養は学校で、そして宗教教育は教会で、学ぶのです。

そして、親も、
自分の子どもの価値観、世界観、生き方について、しっかりと教えるのでなければ、

私たちの子どもたちは、一体この世のどこで自分の生き方を学ぶことができるのでしょうか。

学校では教えてくれないし、もしも公立学校で宗教教育をしたら、それこそ問題になります。

人権問題、憲法問題です。

人の「信教の自由」、「良心の自由」、「内面の自由」を侵害する国家権力の横暴として、大きな問題になります。

子どもが自分の生き方を真に学ぶのは、自分の親からなんです。

親以外に、子どもに教えちゃならないんですよ。

それで、

「父と母を敬え。」

「主にあって両親に従いなさい。」と教えられるのです。

それは、**子どもを教育するため**です。

親自身が崇められ、拝まれるためではありません。

子どもを教育するためです。

神の栄光をあらわす者となるよう、その子を教育するためです。

神と人を愛して生きる者となるよう、子どもを教育するためです。

そのために、神さまは、「あなたの父と母を敬え」とお命じになります。

そして、使徒パウロは、「**主にあって両親に従いなさい。**」と教えるのです。

それほど親には權威も認められていますが、責任もあります。

自分の子どもを教育する、全面的な、100%の責任があるのです。

子どもがよく育たなければ、それは全面的に親の責任だと考えなければなりません。

親がしっかりと自分の子どもを教育しなかったからです。

人任せにして、あるいはほったらかして、親としての權威も行使しなかったし、責任も全うしなかったからです。

神さまは、自分の子どもを教育する權威を責任を、親にお与えになったのです。

親は、ただ子どもに飯を食わせれば、それでことが済んだように考えてはなりません。

子どもを教育するんです。

「主にあって、両親に従え。」と命じられているんですから、

子どもに従えるに足るような、

教える内容を、親自身が持っていなければならないし、

親自身が、子どもの模範にならなければならないと思います。

教育は学校がするんじゃない、親がするんだ、親がやらなきゃ誰もやらない、

このことを自覚し、しっかりと子育てをなして、神の栄光をあらわされるよう、主の御名により祈ります。